

冬の観能の夕べ

(石川県立能楽堂)

令和五年二月四日(土曜日) 午後二時三十分開演

狂言 仏師(ぶっし)

在所で仏堂を建立した田舎者が御本尊とする仏像を求めに都へ出て仏師を探します。賑やかな通りで物を売り買いする声を聞いて、田舎者も「仏を買いたい、仏師はいないか」と呼ばわって歩きます。そんなお上りさんに目を付ける、自称「心の直にない者」(すっぱ)が真仏師を名乗ってすり寄ります。それでも田舎者の無知とすっぱのでたらめは、不思議に会話をはずませて、翌日に身の丈ほどの吉祥天女を買取商談が成立します。約束の時分、約束の場所へ田舎者が出向きますと、なるほど身の丈ほどの仏像が完成していました。仏像と仏師の二役を兼ねるすっぱが、田舎者の注文に応じて仏像の形を変えますが、変わり身が追い付かず正体が露見します。

能 箆(えびら)

都一見を志す西国の僧(ワキ・ワキツレ)が旅の途中、須磨の浦は生田川のとりに足を止め、ひとときわ鮮やかな梅の木を眺めていると、里の男(前シテ)が現れて私に箆(矢を入れて背負う武具)の梅と称すると言い、そのいわれを語ります。源平の一ノ谷の合戦の昔、源氏方の梶原源太景季は生田の森に咲く梅の花を手折って箆に挿し、その笠印で功名を挙げて以来、八幡の神木と崇めた由です。合戦の模様をさらに詳しく語った男は、梅花の主景季の幽霊を名乗り、回向を頼んで姿を消します(中人)。所の者(アイ)から箆の梅の由緒を聞いた僧は再度の奇特を期待して花陰に臥します。やがて箆に梅の枝を挿した華やかな若武者(後シテ)が登場し、修羅道の苦患を見せます。白刃骨を砕く血の海ですさまじい闘争に身を置くのは生前の再現でもあり、これが修羅の現実でもあり、その境を越えて続く武士の悲しい宿命でありました。勝ち修羅とは名のみ、箆の梅も景季のむしろ妄執を象徴し、破戒の罪は敗者と変わらず僧に救済を乞うて消えます。

(西村 聡)

前 シテ (男)

段鬨斗目

白大口

掛素袍

腰帯

扇

後 シテ (梶原源太景季)

面(平太)

梨子打烏帽子

白鉢巻

黒垂

厚板

半切

法被

腰帯

太刀 扇